



Title	話すことと聞くことによる発見について
Author(s)	青木, 健太
Citation	臨床哲学. 2016, 18, p. 159-174
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/60610">https://hdl.handle.net/11094/60610</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 話すことと聞くことによる発見について

青木 健太

## はじめに

「哲学カフェ」や「哲学対話」と名付けられた場所では、複数の人が集まって、お互いに話し聞くということを繰り返す<sup>1</sup>。そのように過ごした後、人々がもつ感想としてしばしば口にすることが「発見があった」ということだ。

しかし、他者と語り合うことが「発見」をもたらすのであれば、私たちの日常はもっと「発見」に溢れていてもいいはずだ。しかし、「発見があった」ということは感想としてあって言われる。それは、話し聞くことを通じて「発見した」という感覚をもつことが、ありふれたことではないからなのだろう。いったいなぜか。また、哲学カフェにおける対話が「発見」をもたらしやすいとすれば、それはどのような構造を備えているからなのだろうか。

本論文では、以上の問いを①テーマについて話し合うこと、②「問い合わせ」の二点から考える。この二点について、『存在と時間』の「語り (Rede)」についての分析を中心に参照し、われわれにとっての「話す」と「聞く」の日常的な在り方と対照させることで、「発見」をもたらす対話のもつ構造を捉える。

## 1. 語りについての分析

『存在と時間』第一編第五章は、「言明 (Aussage)」、「語り (Rede)」、「世間話 (Gerede)」の順で言葉や話すことについての分析をしている。第五章は、「現存在 (Dasein)」——ハイデガーは人間に対してこの特別な呼称を与える——の「開示性 (Erschlossenheit)」の解明という課題を掲げている。開示性は、現存在が自分自身や他の様々な存在者と関わることを可能にしているもので、現存在のあり方に特有の仕組みだ。要するに、ハイデガーは、話すことを単なる言葉のやりとりではなく、人間の存在の仕方に結びつけて分析しているのだ。

ハイデガーの分析では、言葉や話すことについて要になるのは「語り」だ。上述のようなハイデガーの考え方、この語りについて述べる箇所でもっとも明確に示されている。彼の述べていることから検討してみよう。ハイデガーは以下のように言っている。

世界 - 内 - 存在の情態的な了解性可能性は語りとしてみずからを言表する。了解可能の意義全体が語になる。意義は語へと成長してくるのである。反対に、語という事物に意義が与えられるのではない。<sup>2</sup>

ここで言われている情態性 (Befindlichkeit) と了解 (Verstehen) は開示性の構成契機で、語りの分析はこれらに続いて行われている。まず情態性と了解について簡単に確認しておこう。

#### a. 情態的な了解

現存在はそのつど「何かである」のではなく、いつもつねに「何かになろうとしている」、あるいは「何かであります」という仕方で存在するとハイデガーは考えている。現存在は何らかの完結した存在者として存在するのではなく、むしろ次々に新たなあり方へと身を移していくつつある。このような意味で、現存在はみずからのありうる存在、つまり「可能性 (Möglichkeit)」を存在している。可能性を存在するということを、ハイデガーは了解と呼んでいる。このとき、ハイデガーは了解を「～できる」という意味で使っている。現存在は何らかの可能性を単に想定としてもつのではなく、ある可能性をいつもすでに存在している。このように、現存在は何らかの可能性を存在することができる、つまり了解している。了解はつねに次の可能性を目指しており、この動きは「投企 (Entwurf)」と呼ばれる。可能性の了解は、現存在がみずからを次の可能性へと投げ込んでいくという動的な性格をもつ。了解はそれ単体で成り立つものではなく、情態性と一体になっている。情態性は「気分 (Stimmung)」とも呼ばれ、現存在にどのような可能性が開かれてくるかを決めている。

気分によって開示された可能性を了解するということは、現存在がいつでもそのように存在するあり方であって、時にはそのようにするかもしれないような態度の一つではない。ただ黙々と机に向かっているときでも、平静な気分が椅子に座るという可能性を開示し続け、その可能性を投企し続けている。そして、ある瞬間に気分がかき乱されることで椅子

に座るという可能性は閉ざされ、もはや椅子に座っていられなくなる。気が散るという気分が新たな可能性を開示し、そうして開示された可能性を現存在は投企する。たとえば立ち上がり、飲み物を入れていくというように。現存在は何らかの気分に左右されながら、そのつど何らかの可能性を投企している。

さて、先の引用では情態的了解が世界 - 内 - 存在のものだと言っていた。現存在はつねに身の回りにある存在者と関わって存在しているため、現存在がどのような可能性を投企するかがそれらの存在者の理解に影響する。たとえば、机に向かって作業をしている間は、机やその上にある筆記用具などが作業に役立つものとして使われる。しかし、気分転換のために飲み物を入れにいこうとするやいなや、それらはもはや注目に値しないものとなり、場合によっては単に煩わしいものでしかなくなる。役に立つものとして出会われるのは、カップやスプーンなど一群の食器と呼ばれるものたちだ。このように、現存在の身の回りの存在者は現存在の可能性をもとにそのあり方を変える。ハイデガーは「世界 (Welt)」を現存在の可能性を起点とする「～のため」という連関としており、これを「有意義性 (Bedeutsamkeit)」と名づけている。

### b. 語り

上の引用中では「意義全体 (Bedeutungsganze)」ということが言られている。ハイデガーによれば「語りは了解可能性の分節」であり、さらに「語りつつ分節することにおいて区分されたものそのものを、われわれは意義全体と名づける」<sup>3</sup>としている。何らかの了解があるところにはそれに基づく有意義性もあるはずで、それを語りが分節している。こうして分節されたものから語が生じてくる。それゆえ、ハイデガーは語に後から意義が与えられることはないと言っているのだ。

では、語りによる分節とはどういうものなのか。語りには四つの構成契機がある。まず、「語りがそれについて語るところのもの (Worüber der Rede)」、つまり話題となるものがある。さらに、その話題についてどういうことが話されるかという「語られたこと (Geredet)」がある。こうして語られたことは誰かに「伝達 (Mitteilung)」される。語りは了解可能性を分節しているので、語ることはつねに語り手による自分の了解についての表明ということになる。つまり、語りは「みずからを言表すること (Sichaussprechen)」という性格をもつ。実際に何かを伝えようとするとき以外でも、現存在は自分について何かを表明しているし、それがいつも伝達されている。

語りの構成契機に了解との連関がみられるが、ハイデガーはこの連関が「聞くこと (Hören)」から明瞭になるとし、「聞くことは語りにとって構成的である」<sup>4</sup>と述べている。ここでハイデガーが言っている語りと聞くことは、どちらも音声的なやりとりを前提としない。了解との関係に触れつつハイデガーは以下のように言っている。

他の人の語りをはっきりと聞くときも、われわれがさしあたり了解しているのは言わされたことである。より厳密には、われわれは他者と共に前もってすでに、語りがそれについて語っている存在者のもとに在る。それに対して、われわれは発声という意味で発音されることをさしあたり聞いていない。<sup>5</sup>

語りにおいては語られたことが伝達されるが、そのときそれが音声になっている必要はない。むしろ発音されていることに注意を払わなくても、私たちは語られたことを「わかっている」。聞くことについても伝達にしても、それらは言葉のやりとりによって何らかの情報を得ることではなく、他の人と了解可能性を「分かち合う (mit-teilen)」ことだ。

ここまで構造的な分析への言及に終始しているので、具体的な場面で検討しておく必要があるだろう。次に語りの日常的な様態である「世間話」を取り上げるので、そのことも念頭に置いておきたい。

研究室に私ともう一人の学生がいるという状況を想定しよう。今まで机の向かい側で作業をしていた彼は、喉が渴いたのか研究室にあるポットでお湯を沸かし始める。インスタントコーヒーがいつも机の上に置いてあるが、彼はそれをポットの横に移動させた。彼は何やら部屋の中を見回している。私が「コップ？」と聞くと、彼はうなずいた。私は入口の近くにある棚の上を見上げる。手間には紙コップがあり、少し奥の方にティーカップもある。私はティーカップをとって彼に渡す。

ハイデガーの分析に従えば、私も彼もこのやりとりをする以前からずっと何かを言表し伝達しているのだが、わかりやすさを優先して「コップ？」という発言に注目することにしよう。語りの話題となっているのはもちろんコップだ。声に出して言われていないという意味では「語られたこと」が欠落しているように見えるが、それは見かけに過ぎない。私は「コップ？」と尋ねるとき、机の上にあるポットとインスタントコーヒーとの連関においてそう尋ねている。つまり、お湯を沸かして、インスタントコーヒーをポットの横に置くことで、彼は「コーヒーを入れる」という可能性を投企していることを言表し、それ

が私に伝達されたのだ。つまり、ここでは「コーヒーを入れるためのもの」としてコップが話題になっている。このように、彼がコーヒーを入れようとしていることが私に伝達されているので、お湯を沸かすためのもの、飲み物を入れるためにものが必要だと、私は「わかる」。彼が何も言わなくても、彼がどんな了解をもっていて、そしてそこからどのような「～のために」の連関がつくれられているか私には「聞こえて」いる。

彼が何も言表せず伝達もしていないなら、あるいは私が彼の伝達を聞くことができないなら、私は彼が何を探しているかそもそも見当がつかない。「コップ?」という一言が了解との連関をもっていなければ、迷わずティーカップを渡すこともできない。彼の了解を分かち合うことができなければ、熱いものを入れるのに紙コップは適切ではないという理解を私がもつことはないからだ。

語りについての検討はこれで十分だろう。先に少し触れたが、ハイデガーは語りの日常的な様態の分析をしている。次はその分析を追跡することにしよう。

## 2. 世間話

ハイデガーは上述の語りの日常的な様態が「世間話」だと言う。つまり、私たちが普段している会話は語りではあるのだが、ある変容を被っているのだ。これについて検討する前に、まず確認しておかなければならないことがある。

ハイデガーの分析の順序では、了解と語りの間に「解意(Auslegung)」と「言明(Aussage)」についての分析が入る。解意は「了解において投企された可能性の仕上げ」<sup>6</sup>であり、言明は「了解に基づき解意の派生的な遂行形態をなす」<sup>7</sup>。先に見たとおり、語りは了解可能性を分節しているので、構造上は語りが解意と言明に先行している。この二つのうち、解意は語りの日常的な様態に直接関係する。言明についても後で哲学カフェについて考える際に参考にしたいので、これらについてハイデガーの分析を追うことにしよう。

### a. 解意

ハイデガーは「解意において了解は何か他のものになるのではなく、それ自身になる」<sup>8</sup>と言う。了解は語りによって分節されるが、実はその時点ではまだ何かが何かとして把握されているわけではない。上の例ではわかりやすさを優先して「コップ」という言葉を使ったが、実際に私たちがコップを誰かに渡そうとするとき、私たちは自分が持つ

ているものをいちいち「これをコップとして使う」と確かめているわけではない。解意とはこの「として (Als)」を画定することであり、この意味で可能性の仕上げと言われている。

解意はすでに投企された可能性を仕上げるので、了解のもつ「先 - 構造 (Vor-Struktur)」をもとに遂行される。まず、解意はある可能性の了解を発端に構成される連関について遂行される、つまり解意は「先持 (Vorhabe)」に基づいている。さらに、どのような観点から解意するかということも了解においてあらかじめ見通しがたっているので、解意は「先視 (Vorsicht)」に基づく。解意はどのような概念を存在者に当てはめるかも先に決めていて、これが三つ目の契機である「先取 (Vorgriff)」だ。先持、先視、先取という先 - 構造に基づいて、何かが何かとして解意される。

先の例のコップについていようと、まずコーヒーを入れるという可能性によって開示される一群の存在者の連関がある。この場合、それぞれの存在者は最終的に「コーヒーを入れるために」につながる「～のため」の連関をなしているので、この連関に組み込まれる存在者は「食器」という観点から見られる。そしてその中でも「熱い飲み物を入れるために」は「ティーカップ」という種類のコップなので、こうしてある存在者がティーカップとして解意されることになる。

さて、ある存在者をティーカップとして解意するというと、「これはティーカップだ」と言語的な表現をしているように思える。しかし、ハイデガーは解意が言葉を用いて言明されている必要はないという。では言明においてはどのようなことが起こるのだろうか。

## b. 言明

ハイデガーは「挙示 (Aufzeigung)」、「陳述 (Prädikation)」、「伝達 (Mitteilung)」の三つを言明の意義とする。「このコップは重い」という言明からこの三つの意義を確かめよう。

まず「このコップは重い」と言われるとき、「コップ」という存在者に焦点が当たっているが、これが挙示だ。そして、その挙示された「コップ」は「重い」という限定を受けている。これが陳述だ。こうして挙示され陳述されたことが誰かに伝達される。ただし、ここでいう伝達は語りの伝達とは異なっている。この違いを理解するためには、先に言明がもつ性質について把握しておいた方がいいだろう。

ハイデガーによれば、言明において解意の「として」は「その分節の諸可能性について、環境世界を構成する有意義性の指示連関から切り離される」<sup>9</sup>。語りも解意も投企された

可能性との関わりをもっているが、言明ではその可能性との関わりが遮断される。つまり、「このコップは重い」という言明は、「飲み物を入れるためのもの」というような「使用」の観点をもっていないということだ。この言明の中での「重い」は、「コップ」には「重さ」という性質が備わっていることを指摘している。

このように、挙示と陳述は「～のため」という連関から離れて存在者を捉えることを可能にする。同じ「重い」という言葉も、語りでは「～のため」という連関において言われる。先の例で、私が彼にコップを渡したとき彼が思わず「重っ！」と言ったとしたら、それはコップの性質を指摘しているのではない。この場合の「重っ！」は「重くて使いづらい」という意味だ。私は別のコップを渡すか、「それしかないから我慢して」と応答するだろう。「このコップは重い」とただ言明だけを聞いたときには、私たちがそのような行動をとることはない。

言明は「～のため」という連関から存在者を切り離すことができるために、その伝達はある特徴的をもつ。まず、言明されたことは挙示されたものがその場になくても他者に伝わる。「重っ！」とだけ突然言わても何のことかわからないが、「このコップは重い」という言明はコップが目の前になくても理解できる。そのため、一度言明されたことはそのまま他の人へどんどん伝わっていく。しかし、こうして言明が広まっていくと、「挙示されたことがかえって覆われてしまいうる」<sup>10</sup>。「このコップは重い」という言明は解意に、つまりある可能性の投企に由来するが、もはやその由来が何なのかは言明にとって問題にならない。

語りにおける伝達は可能性の分かち合いだったが、言明はある可能性との関連から一步退いて存在者を観察する。語りと言明は、可能性との関わり方という点に明確な違いがあるのだ。

### c. 世間話

少し回り道をすることになったが、ここで語りの日常的なありかたである「世間話」についてハイデガーが述べていることを見していくことにしよう。解意について先に確認しておいたのは、世間話の要となるのが「既成的解意（Ausgelegtheit）」だからだ。

語りを聞くとき、私たちはその語りにおいて言表されている可能性を分かち合う。しかし、その分かち合いはそのつど一から新たに始められているのだろうか。話題とそれについて語られたこと、そして言表されている可能性の投企を、私たちは逐一聞きとっている

だろうか。もちろんそんなことはない。もしそんなことをしているのだとすれば、あれほどスムーズにティーカップを渡すことなどできないはずだ。

私たちはそのつど新たに解意を始めているのではなく、すでに用意された既成的解意をあてにしている。「さしあたって、そしてある限界内ではいつも、現存在はそれ〔既成的解意〕に委ねられていて、それが平均的な了解とそれに属する情態性の可能性を制御し配分している」<sup>11</sup>。私たちは「こういう場合はたいていこうすればいい」という指示をくれる既成的解意をもとに可能性を投企している。みんながみんな同じように既成的解意をもとに了解しているから、了解そのものも平均的なものになる。語りはさしあたりこうした平均的な了解を分節している。「言表するときに発言される言語には平均的な了解が含まれていて、それに従えば、聞く人が語りのそれについて語るところのものへと根源的に了解しつつ在ろうとしなくとも、伝達された語りが十分に了解されうる」<sup>12</sup>。聞く人が語る人の了解を改めて確かめる必要はない。「言われたことは共通に同じ平均性のなかで了解されているから、同じことを考へるのである」<sup>13</sup>。聞く人も平均的な了解をしているから、語られたことを一から十まで聞かなくても相手の語っていることはだいたいわかる。

このように、既成的解意はそのつど了解を一から吟味することなく語りを聞くことを可能にする。そして、このような語りがハイデガーの言うところの世間話なのだ。世間話によって、私たちは瞬時に他の人のしようとしていることがわかり、しかるべき応答することができる。机の上にポットとインスタントコーヒーを並べた人はたいていコーヒーを入れようとしていて、実際その理解は外れていないのだ。机の上にあるものと、目の前にいる人とについて逐一吟味しているのでは、それこそ話が進まないだろう。世間話によって、私たちはスムーズにお互いのことを理解することができる。

さて、世間話では平均的な了解が伝達され聞かれているからスムーズなやり取りができるのだが、逆に言えば、世間話はそのつど投企されているはずの可能性をとりあげることをしない。この点についてハイデガーは、「それゆえ、世間話はもともとから、語られたものの基盤に戻っていくことをしないというそれに固有の怠りに従って、ある閉鎖（Verschließen）なのだ」<sup>14</sup>と述べている。逐一言表された可能性を吟味して聞く必要がないということは、そのつど投企されているはずの可能性が覆い隠されるということの裏返しになっている。世間話における語りと聞くことは、そういう意味で何かを隠してしまっているのだ。言明とはまた違う仕方ではあるが、世間話もまたそのつど投企されている可能性と直接的にかかわることをしない。

これでハイデガーの分析のうち必要な個所の検討は完了した。次はハイデガーの分析を頼りにしながら哲学カフェについて考えることにしよう。

### 3. 対話の中の発見

哲学カフェには進行のスタイルや参加者の傾向などによって様々な形態がある。何らかの目的をもって対話をを行う場合もあるし、参加者が共通した背景をもつ場合もある。場所も学校や病院などのことあれば、商店街の喫茶店ということもある。しかし、何らかのテーマを設定し、それについて問うという仕方で対話をするという点はどの哲学カフェにも共通しているだろう<sup>15</sup>。以下ではテーマと問うことについてハイデガーの分析をもとに考え、哲学カフェにおける「発見」の仕組みを明らかにしようと思うが、その前に対話の感想として言われる「発見があった」という報告について今一度検討しておきたい。

#### a. 「発見があった」の意味

哲学カフェの感想として「発見があった」と言われるとき、この報告には注目すべき特徴がある。それは、「発見があった」ということを言いつつも、実際に何を発見したかが曖昧だということだ。典型的なパターンとして「いろいろ発見があった」という言い方をよく耳にするが、その「いろいろ」が具体的に何なのかは往々にしてはっきりしない。しかし、だからといって何も発見がなかったことを取り繕っている発言だとも思われない。というのも、「いろいろ発見があった」という発言には「うまく言えないけれども」という前置きがしばしば伴うからだ。「うまく言えないけれども、いろいろ発見があった」という発言は、少なくとも何かを見つけたという「感覚」ないし「手ごたえ」をもったことを報告しているのだ。

このように説明したところで、「うまく言えないけれども、いろいろ発見があった」という報告は曖昧で具体性を欠くゆえ、その発見の深刻さは疑わしいものに思われるかもしれない。しかし、私たちが何かを発見したと「感じる」のは、それが慣れ親しんだ何かとは異なるものだからだ。そして、発見されたものが私たちにとってまったく予期せぬものであったならば、私たちはそれが何なのかを表現する方法をこれからつくらなければならないかもしれない。そうであれば、発見したものが何かをすぐに言い当てられる場合、私たちはごくありふれたものを見つけただけなのではないか。目の前にあるものが私たちの

出会ったことのないものであるならば、私たちはそれが何かを言い当てることができず絶句してしまうのではないか。

このように考えると、「うまく言えないけれども、いろいろ発見があった」という感想は、少なくともそれについて語ったことがないようなものとの接触があったことの報告として理解することができる。そして、これを感想として報告したくなる程度には、その「感覚」をもった人にとってインパクトのある発見だったと理解してよいだろう<sup>16</sup>。

以上を踏まえ、本章では「何を発見したか」を考えるのではなく、「発見した」という報告がされるのは「何ができたときか」について考えることにしたい。発見が衝撃的であればあるほど言葉にし難いとすれば、発見したものが「何か」を問題にしてしまうと、表現できるものの発見の範囲に議論が限られ、結局はありふれたものの発見の構造を捉えることしかできないからだ。

## b. テーマ

ここからは具体的に哲学カフェを構成する要素について考えていくことにしよう。まずテーマについて考える。哲学カフェの参加者は、何か一つのテーマについて考えるということが日常ではめったにないということをしばしば指摘する。テーマという要素は哲学カフェを日常会話から区別する重要な要素として理解されているのだ。

哲学カフェのテーマ設定については、ハイデガーの言明、語りの分析をもとに考えると大きく二通りに分けることができる。

まず言明にとっての話題、つまり挙示という意味での話題がある。言明は挙示されたものを有意義性の連関から切り離して扱うことを可能にする。そのため、誰がどのような了解をしたのか考慮しなくとも、挙示されたものであるかぎりは誰もが共有できるし、それについて話すこともできる。特定の場面や用途などに拘束されることなく何かについて話し合いたい場合は、挙示という仕方で設定されたテーマが向いている。このテーマ設定の仕方では、先の例で示した「重さ」のように、テーマとされたものにそなわる性質を見つけることができる。

挙示は誰もがそれについて話しやすいという特徴があるが、特定の可能性との結びつきをもたないので、対話が具体的な場面から遊離して机上の空論になってしまうおそれがある。とはいえ、このことをデメリットのように指摘することは不適切かもしれない。挙示されたものと具体的な場面との結びつきを問題にすること自体、言明の性格からしてナン

センスだと言ったほうが適切だろう。

もう一方の話題のタイプとして、語りがそれについて語るところのものとしての話題がある。語りは了解可能性の分節なので、その話題は何らかの特定の可能性と密接に関係している。何かについて一步退いた視点から考えるのではなく、私たちが話し合おうとしているものにどのように関わっているのかを具体的に考えたい場合は、語りという層で話題が設定されている必要がある。語りの話題としてテーマを受とめると、何かが何かとして理解されるとき、それが私たちのどのような振る舞いに由来するのかを見つけることができるだろう。

語りの話題は特定の可能性と結びついているので話し合いが空中戦になる心配はないが、話題と関係している可能性を対話の参加者の間でどの程度共有することができるのかが問題になる。つまり、話題となっているものと自分自身とがある程度は関係するという理解をもった人でなければ、そもそもテーマについて考えることができないということがありうる。

ところが、実際にはこのようなことはおそらく問題にならない。語りはたいてい世間話という様態をとり平均的な了解を分かち合っているので、私たちはたいていのことについて誰もが同じことを考え共有できていると思っているからだ。しかも、世間話には既成的解意があるから、そもそもどんなテーマについても最初から答えが与えられていて考えなくてわかると私たちは思っている。

こうして、語りの話題としてテーマを設定したりそれについて考えようしたりすることは、当の語りが普段とっている様態によって妨げられてしまう。ハイデガーは世間話を閉鎖として特徴づけていたが、ここでは語りの話題としてテーマを扱うことの困難として世間話の閉鎖という性格が影響している。私たち自身の振る舞いとのかかわりの中で何かについて考えたいのであれば、この困難を避けることはできない。

何かを語りの話題として扱うためには、世間話に抵抗する必要がある。その抵抗になっていると考えられるのが、テーマを問い合わせて設定するということだ。次はこの点について考えてみよう。

### c. 問うことによる発見

世間話においてはあらゆることがすでにわかっているものとして提供されており、これが日常の円滑なコミュニケーションを可能にしている。しかし、世間話はそのようにすべ

てをわかっているものとすることで、そのつど投企されている可能性をそのものとしては覆い隠してしまう。実はこの閉鎖についてハイデガーは次のように言っている。

語られたものの了解が達成されていると思い込んでいる世間話は、この思い込みに基づいてあらゆる新たな問い合わせすべての対決とを妨げ、ある特有の仕方で抑圧し遅らせているが、このことを通してそれ〔閉鎖〕がいっそう強まっていく。<sup>17</sup>

引用は否定的なニュアンスがいささか強すぎるが、日常会話で問い合わせが抑圧されることは無理のことであり、むしろ必要でさえある。相手の言っていることについて、一つ一つの言葉が意味することをいちいち問題にして問い合わせていたのでは、単純なやり取りもきわめて複雑な手続きを要求することになり、スムーズな会話が成り立つ余地はなくなる。世間話においては、共有されていることに疑問をもつことは禁止事項なのだ。

テーマを語りの話題として考える場合、私たちはこの禁止事項を破らなければならない。「あえて何かに疑問をもつ」ということは世間話に抵抗することなのだ。すべてをわかっているものとしている世間話に抗って、既成的解意に頼らず一から解意を始めてみる。こうすることで、私たちはある特定の了解可能性との連関を保ちながらテーマに選ばれたことについて考えることができる。

しかし、だからといってテーマが問い合わせの形式をとっていればそれですむということではない。世間話の閉鎖に対抗できるかどうかは、問うという姿勢を維持できるかどうかにかかっている。というのも、私たちがスムーズにお互いのことを理解することができている限り、私たちはいつも世間話の中に身を置いているからだ。世間話は私たちが完全に克服してしまえるようなある傾向といったものではない。私たちはいつでも世間話に巻き込まれていて、かろうじてそれに抵抗することができるくらいなのだ。問うことを止めればたちまち世間話に巻き込まれてしまう。しかも、対話の中で可能な抵抗の範囲はそのときのテーマに限られている。テーマに関する事では言いよどむことがあっても、それ以外の部分で滞りなく話すことができていなければそもそも対話そのものが成立しないはずだ。

それでも、対話は世間話への抵抗について理想的な状況をつくると考えられる。対話に参加している人々がそれぞれ問うという姿勢を貫くと、世間話への抵抗はより強力なものとなるからだ。対話の参加者がそれぞれの了解をもとにテーマについて考えると、おのの語りの間に差異が生じ始める。この差異を均すことなく対話において保持しつづけれ

ば、おのずと平均的な了解に基づく共通理解に抵抗することへつながる。世間話に抵抗する対話の中では、自分自身のそれとは異なる語りを聞きとり、そこに言表された他の人の了解を分かち合う機会が与えられる。そして同時に、他の人とは異なることを語っている自分自身の了解も明らかになる。

対話は平均的な了解に抗して、人それぞれの了解の差異を際立たせる。その差異を無くしてしまうことがないよう自分自身の聞き方そのものにも問い合わせ、そこに含まれる既成的解意を払いのけることで、世間話が覆い隠している語りを聞くことができる。私たちが対話をすることで何かを見つけたと感じるのは、おそらくこのことができた瞬間だ。そこではまさに、世間話が隠していたことの「発見 (ent-decken)」<sup>18</sup> があるからだ<sup>19</sup>。そうであれば、この発見において私たちが出会うのは、私たちにとって全く新しい未知の何かではなく、むしろ私たちが今までそうしてきたこれからもそうするだろう了解だ。

対話における発見の衝撃は、見つかったものの目新しさではなく、世間話の既成的解意をとおさず自分の了解に臨むというその出会い方に由来しているのだ。だからこそ、対話をとおした発見は、「うまく言えないけれども、いろいろ発見があった」という発見の内容ではなく「発見した」というその出来事を優先的に報告する形になるのだろう<sup>20</sup>。

ところで、言明のことが置き去りになっていた。前節で述べたとおり言明においても何かを見つけることはありうる。しかし、言明はそもそも可能性との連関から切り離されているから、挙示されたもののもとではここでいうような種類の発見は原理的にありえない。言明においてはまず可能性との連関が回復される必要がある。しかし、前述のとおり挙示されたものとしてのテーマにおいては可能性との連関は問わないことにしているから、連関の回復ということは問題にならないだろう。

## おわりに

ハイデガーの分析をもとに哲学カフェで起こる発見について考えたところ、それを世間話による閉鎖に抗して語りを聞くこととして明らかにすることことができた。世間話に抵抗しつつ聞くことは、平均的な了解に対してあえて疑問をもつこと、つまり問うという姿勢において可能になる。そこで私たちは既成的解意を介さず直に自分や対話の相手の了解を発見する。そしてこれが、「うまく言えないけれども、いろいろ発見があった」という報告が言わんとするところなのだ。

最後に問うということができるために必要な条件に言及しておこう。私たちがスムーズに会話できるのは、お互いに疑問をもたずに相手の言うことを聞くときだ。もしここで会話の内容について一から問い合わせてしまうと、会話は滞ってしまう。普段の会話では円滑なやり取りをすることが大切だから、会話を滞らせるようなことは避けなければならない。会話を滞らせるようなことをしてしまうと、話し相手はいらだち始めるだろう。そして私たちちは慌てて会話を立て直す。

このように、普段の会話の中で問い合わせを立てると煩わしさという気分に襲われ、私たちは問うことを避けられない。会話が停滞してもいら立ちや煩わしさを呼び起こすことがないところでないと、問うことは続かない。それゆえ、問い合わせを続けるためには日常の慌ただしさから離れることのできる場所が必要だ。そして、その場が会話の停滞を肯定的なものとして受けとめる場であることを示すのが対話の進行役と呼ばれる人の役割だろう。

哲学カフェをする際には話し合いやすい環境づくりが重要だが、会話の停滞を嫌わない場とすることが重要な要素の一つとなるだろう。

## 参考文献

- Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 19. Aufl., Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 2006. (引用の際は SZ の略号と  
頁数を示した。)
- 門脇俊介、『破壊と構築 [ハイデガー哲学の二つの位相]』、東京大学出版会、2010 年。
- 斎藤元紀、『存在の解釈学 ハイデガー『存在と時間』の構造・展開・反復』、法政大学出版局、2012 年。
- 渡邊二郎、『渡邊二郎著作集』第 1 卷、筑摩書房、2010 年。
- 渡邊二郎、『渡邊二郎著作集』第 9 卷、筑摩書房、2011 年。
- 池田喬、「『存在と時間』における発話概念と命題に対する実存論的アプローチ」、『現象学年報』25 号、2009 年、  
115-123 頁。
- 木村史人、「ハイデガーにおける「最も危険なもの」としての言葉」、『哲学』62 号、2011 年、205-220 頁。
- 高屋敷直広、「〈対話〉における開示の〈場〉——ハイデガー『存在と時間』における根源的倫理の萌芽——」、  
『倫理學年報』65 号、2016 年、163-177 頁。

## 注

1. 以下では「哲学カフェ」という呼称を用いる。
2. SZ, 161.
3. SZ, 162.
4. SZ, 163.
5. SZ, 164.
6. SZ, 148.
7. SZ, 154.
8. SZ, 148.
9. SZ, 158.
10. SZ, 155.
11. SZ, 167. [ ] は発表者による補足。
12. SZ, 168.
13. SZ, 163.
14. SZ, 169.
15. たとえば「子どものための哲学」、通称「P4C (Philosophy for children)」は学校教育という文脈の中で対話を通して思考を深める活動を行い、子どもたちの思考力とコミュニケーション力を養うことを目的として哲学対話を展開している。P4C は様々な方法を開発しているが、必ず何らかのテーマを設定し対話をを行うというかたちをとっている。学校での哲学対話については、河野哲也の『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』(河出ブックス、2014 年) が理論から実践的な方法までをまとめている。
16. 哲学カフェでは何らかの結論にいたることを目指すこともあるが、時間いっぱい考え続ける場合はたいてい参加者全員が合意するような結論にいたらず終わる。後者のスタイルの哲学カフェは、「オープンダイアローグ」と似た性質をもつかもしれない。精神病に対する治療法として考案されたオープンダイアローグは、患者や家族そして治療者が直面する危機的状況を対話によって乗り越えようとする。そして、その対話では結論を急いではならないとされている(斎藤環著+訳、『オープンダイアローグとは何か』、医学書院、2015 年、93 頁以下参照)。これは対話が曖昧さを許容しうるという点に注目して、病気による不安定な状態を耐えきるための支えに対話を応用したものだと考えられる。もっとも、オープンダイアローグは精神科医が主導する対話であるため、哲学カフェにおける対話と無条件

に結び付けて考えるわけにはいかない。しかし、筆者が行っている障害のある子どもをもつ母親たちによる哲学対話では、対話することで「気持ちが楽になる」と母親たちは言う。対話そのものに安心感を生む要素が備わっているのかもしれない。

17. SZ, 169. [ ] は発表者による補足。
18. ドイツ語の「entdecken」は英語の「discover」と同じく、字義どおりには「覆いを取り除く」という意味。
19. おそらく「話が深まる」という感覚を対話の中でもつもこの瞬間だと思われる。既成的解意が与えてくれるのはありふれた理解でしかない。問うということにおいて、誰もが前もって共有している事柄を突き抜けた層に触れることができる。
20. 哲学カフェにおける発見がこのようなものだとすると、哲学カフェの意義は何なのか。この問いは本論文の主題から外れるため詳しく論じることができないが、J.S. ミルの主張を借りて簡単に説明しておきたい。ミルは『自由論』の第二章で自由な討論や意見の表明が「人類の精神的幸福」に必要だということを、四つの根拠を挙げて訴えている。その要点は、①正しい意見が沈黙を強いられるかもしれない、②誤謬であるとして退けられた意見も一部は正しいかもしれない、逆に支配的な意見が一部に誤謬をふくんでいるかもしれない、③一般に受け入れられている意見も、熱心な議論の対象にならない限りは偏見のようにして人々に受け入れられるに過ぎない、④教説が形式化して個々人への影響力を失い、個人的な体験からその教説を受けとめることが阻害される、という四点だ（関嘉彦責任編集、『自由論』『世界の名著 ベンサム J.S. ミル』、中央公論社、1979 年、275 頁以下）。哲学カフェの対話は本論文の第三章 c で述べているとおり、世間話の既成的解意によって覆われている人々の了解を発見する。それゆえ、哲学カフェは少なくとも③と④には貢献しており、①と②にも寄与する可能性をもつ。つまり、哲学カフェはミルが必要だというような自由な討論の一形態として機能することができ、この点で有意義だといえる。なお、ミルは上述の四つの根拠をまとめた後で討論の際の態度や言い回しについて言及しているが、その内容は対話における「セイフティ」について述べているものとして理解することができる。